

2008年度 1年の記録

年月日	行事・できごと
2008.4.1	鎌田東二(宗教哲学、民俗学)教授着任。有田恵(倫理学)、畑中千紘(臨床心理学)を特定研究員として採用。長岡千賀(認知心理学)、渡邊慶(認知神経科学)を日本学術振興会特別研究員として受け入れ
2008.4.22	こころの未来研究センター協議員会(第10回)
2008.5.3	こころの未来講演会 Doris Lier(ユング派精神分析家)「The unprivate House: 現代建築と意識」
2008.5.13	こころの未来講演会 Steve Heine(The University of British Columbia教授)「What Happens When Kafka Enters the Psychology Lab? Experiments on the Meaning Maintenance Model」
2008.5.15	平成20年度日本学術振興会外国人特別研究員(欧米短期)の受け入れ(2008.8.13まで) Norasakkunkit Vinai(ミネソタ州立大学助教)
2008.5.22	こころの未来講演会 Tamar Kron(テルアビブ大学教授)「Psychotherapists' dream about their patients(クライアントについてのセラピストの夢)」
2008.5.27	第26回こころの未来セミナー 鎌田東二(こころの未来研究センター教授)「こころと『神秘世界』—福来友吉・柳宗悦・宮沢賢治の『心理学』的探究—」
2008.6.1	大石高典(生態人類学・文化人類学)を特定研究員に採用
2008.6.4~8	国際人間行動進化学会(共催:こころの未来研究センター)
2008.6.5	第1回こころ観研究会「こころの始まり、始まりのこころ」 入来篤史(理化学研究所チームリーダー)「サルからヒトのこころへ—知性進化と神経生物学」、石井匠(こころの未来研究センター共同研究員)「縄文時代のこころ—土器文様の分析から」、河合俊雄(こころの未来研究センター教授)「もの・内面・接点—心理療法における心観を求めて」
2008.6.6	稲盛財団からの寄付受け入れセレモニー
2008.6.8	研究会「発達障害とその支援」(共催:京都大学グローバルCOE『心が活きる教育のための国際的拠点』) 河村暁(「発達ルームそら」代表)「学習障害(LD)児へのワーキングメモリに配慮した教育的支援」、船曳康子(京都大学大学院医学研究科科学振特別研究員)「発達障害者の支援に関する課題」
2008.6.17	こころの未来研究センター協議員会(第11回)
2008.6.22	第1回こころの広場「こころと里山」(共催:京都府) 湯本貴和(総合地球環境学研究所教授)、高林純示(京都大学生態学研究センター長)
2008.6.24	平成20年度日本学術振興会サマープログラムによる受け入れ(2008.8.19まで) Kimel Sasha(ミシガン大学心理学部大学院生)
2008.7.15	注意プロジェクト研究会 金井良太(University College of London)「電磁サイコフィジックス:脳非襲撃的磁気刺激と電流刺激による視覚研究」
2008.7.28	こころの未来講演会 樋口さとみ(英国ランカスター大学心理学部リサーチアソシエイト)「他者の行動観察と ventral premotor と temporo-parietal junction の役割」
2008.8.5	第3回依存症研究会 Mikhail Votinov(京都大学医学研究科附属高次脳機能総合研究センター大学院生)「Endowment Effect and neural representation of price evaluation」、村上幸史(神戸山手大学現代社会学部准教授)「『連続した』不確定事象に関する認知と行動—ギャンブラーの認識から」
2008.8.26-30	バリ島研修(「京都における癒しの伝統とリソース」プロジェクト)
2008.9.4	第27回こころの未来セミナー 岡ノ谷一夫(理化学研究所脳科学総合研究センター生物言語研究チーム・チームリーダー)「言語起源の生物進化的シナリオ」

2008.9.28	第2回こころの広場「引きこもりと教育臨床」(共催:京都府) 森下一(森下神経内科診療所所長)「引きこもりの子どもたちと向き合って」、桑原知子(京都大学大学院教育研究科教授)「学校カウンセリングと心理臨床」
2008.9.30	『こころの未来』創刊号刊行
2008.10.14	こころの未来研究センター連携協議会(第2回)
2008.10.16	第28回こころの未来セミナー 妙木浩之(東京国際大学教授)「心の経済について:精神分析の貢献」
2008.10.28	こころの未来研究センター協議員会(第12回)
2008.10.31	稲盛財団記念館竣工披露式挙行
2008.11.14	「こころ学」ブログ、スタート
2008.11.18	第29回こころの未来セミナー ジョーン・ハリファックス(米国ウバヤ禅センター長)「死に近づく人の友をつとめる—終末期の慈悲」
2008.11.26	こころの未来研究センター、稲盛財団記念館2階に移転
2008.11.30	シンポジウム「平安京のコスモロジー」(共催:京都府) 基調講演:岡野玲子(漫画家)「陰陽師から見た平安京」、内藤正敏(写真家、東北芸術工科大学教授)「平安京の宗教構造—江戸・東京との比較の観点より」、河合俊雄(こころの未来研究センター教授)「京都の癒し空間」、パネリスト:鳥居本幸代(京都ノートルダム女子大学教授)「平安京の食とファッション」、原田憲一(京都造形芸術大学教授)「平安京の自然学」、中村利則(京都造形芸術大学教授)「京の茶室とわび・さびの美学」、関本徹生(京都造形芸術大学教授)「京の妖怪」 司会:鎌田東二(こころの未来研究センター教授)
2008.12.3	顔認知に関する講演会 Carl Gaspar(グラスコー大学研究員)「USING PSYCHOPHYSICS AND FACIAL STATISTICS TO UNDERSTAND THE INFORMATION UNDER LYING FACE IDENTIFICATION」
2008.12.4	こころの未来講演会 下條信輔(カリフォルニア工科大学教授)「学習のダイナミックなループと創造性」
2008.12.6	第3回こころの広場「脳科学と社会の関わり」(共催:京都府) 川人光男(国際電気通信基礎技術研究所脳情報研究所長)「脳科学と社会の関わり」
2008.12.14	「こころ」を考える高校生フォーラム(共催:京都府) 鎌田東二(こころの未来研究センター教授)「『となりのトトロ』と『千と千尋の神隠し』から見た戦後日本人の『こころ』の変化」
2008.12.22	こころの未来研究センター協議員会(第13回)
2009.1.22	第30回こころの未来セミナー 安藤寿康(慶應義塾大学文学部教授)「遺伝マインドのすすめ—ふたご研究から」
2009.2.24	こころの未来研究センター協議員会(第14回)
2009.2.28	第6回こころの未来フォーラム「依存と自立」 中村努(NPO法人「ワンデーポート」施設長)「回復施設の現状と課題:ギャンブル依存に関して」、James P. Whelan(メンフィス大学教授)「Assessment and Treatment of Pathological Gambling」、Tatia Lee(香港大学教授)「Neurological Basis of Impulse Control」、谷岡一郎(大阪商業大学長)「日本のカジノ・プレイヤーの特徴とギャンブル依存症の問題点—依存症研究の今後のあり方および具体的計画について—」
2009.3.1	第6回こころの未来フォーラム サテライトワークショップ「Gambling, Reward, Decision-Making, and The Prefrontal Cortex」 村井俊哉(医学研究科脳病態生理学講座准教授)「Social decision making and clinical psychiatry」、Alan Dagher(マギル大学教授)「Prefrontal-striatal interactions in drug and non-drug reward processing: fMRI and PET studies」、澤本伸克(医学研究科高次脳機能統合研究センター助教)「Dopamine neurotransmission during working memory and financial reward processing in health and Parkinson's disease」、坂上雅道(玉川大学脳科学研究所教授)「Reward inference by monkey prefrontal and caudate neurons」、竹田里江(札幌医科大学保健医療学科助教)「Effect of reward schedule on task-related activity in the primate dorsolateral prefrontal and orbitofrontal cortex」、Anthony Phillips(ブリティッシュコロンビア大学教授)「Anti-Parkinsonian drugs provide important insights into neural substrates of compulsive gambling」
2009.3.2	第6回こころの未来フォーラム Mini-Workshop (organized by S. Funahashi)
2009.3.31	『こころの未来』第2号刊行

2008年度 仕事一覧

吉川左紀子 (教授)

論文

Sato, W., Kochiyama, T., Uono, S., & Yoshikawa, S., “Commonalities in the neural mechanisms underlying automatic attentional shifts by gaze, gestures, and symbols,” *Neuroimage*, 2009, in press.

Adams, R. B. Jr., Rule, N. O., Franklin, R. G. Jr., Wang, E., Stevenson, M. T., Yoshikawa, S., Nomura, M., Soto, W., Kveraga, K., & Ambady, N., “Cross-cultural reading the mind in the eyes: An fMRI investigation,” *Journal of Cognitive Neuroscience*, 2009, in press.

Yoshikawa, S., & Sato, W., “Dynamic facial expressions of emotion induce representational momentum,” *Cognitive, Affective, and Behavioral Neuroscience*, 2008, 8, 25-31.

Sato, W., Kochiyama, T., Uono, S., & Yoshikawa, S., “Time course of superior temporal sulcus activity in response to eye gaze: A combined fMRI and MEG study,” *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 2008, 3, 224-232.

小川時洋, 吉川左紀子「他者の視線方向と表情が情動刺激に対する視覚的注意に及ぼす効果」『認知心理学研究』2008, 5,83-91.

野村光江, 吉川左紀子, Reginald B. Adams, Jr. 「『まなざしから心を読む』ことと文化」『電子情報通信学会技術研究報告』, 2008, HCS2007-63, 1-4.

布井雅人, 吉川左紀子「好みの形成に処理水準が及ぼす影響」『電子情報通信学会技術研究報告』, 2008, HIP, 108 (282), 63-67.

学会発表, ワークショップ等

Minemoto, K., & Yoshikawa, S. “Temporal aspects of the adaptation effect in facial expressions of emotion.” The 31th European Conference on Visual Perception. Utrecht, The Netherlands. 2008.8.24-28.

Nomura, M., Adams, R.B., Jr., Yoshikawa, S., Stevenson, M, & Ambady, N. “Mind reading and cultural identity.” Human Behavior and Evolution Society Conference. Kyoto University, Japan. 2008.6.4-8. Nomura, M. & Yoshikawa, S. “Gaze and facial expressions when talking about emotional episodes.” 12th European Conference on Facial Expression. University of Geneva, Switzerland. 2008.7.28-31.

Ozono, H., Watabe, M., & Yoshikawa, S. “Reward and punishment to linguistic and facial signals.” The 20th Annual Conference of Human Behavior and Evolution Society, Kyoto University, Japan. 2008.6.4-8.

木原香代子, 伊藤美加, 吉川左紀子「顔の意味情報の連合記憶」『日本心理学会第72回大会発表論文集』918. (北海道大学, 札幌市) 2008.9.19-21.

木村洋太, 野村光江, 五十嵐由夏, 市原茂, 吉川左紀子「自己表情表出と表出タイミングが顔の魅力判断に及ぼす効果:予備的検討」『日本心理学会第72回大会発表論文集』695. (同上).

嶺本和沙, 吉川左紀子「表情刺激におけるプライミング効果の検討」『日本認知心理学会第6回大会発表論文集』61. (千葉大学, 千葉市) 2008.5.31-6.1.

長岡千賀, 桑原知子, 吉川左紀子, 小森政嗣, 渡部幹「心理面接における話者理解に関する実証的検討 (4)」『日本心理学会第72回大会発表論文集』760. (北海道大学, 札幌市) 2008.9.19-21.

中嶋智史, 吉川左紀子, 細井菜穂「パートナーの魅力が顔の印象評価に及ぼす影響」『日本心理学会第72回大会発表論文集』692. (同上).

野口素子, 吉川左紀子「表情表出の操作が受け手の情動状態と他者認知に及ぼす影響」『日本心理学会第72回大会発表論文集』1077. (同上).

野村光江, 吉川左紀子, Adams, Jr. Reginald B. 「心的状態の推論における人物情報の影響」『日本心理学会第72回大会発表論文集』785.(同上). 布井雅人, 吉川左紀子「好みの形成に処理水準が及ぼす影響」『日本認知心理学会第6回大会発表論文集』96. (千葉大学, 千葉市)

2008.5.31-6.1.

布井雅人, 吉川左紀子「好みの形成に処理水準が及ぼす影響—無意味図形を用いた検討—」『日本心理学会第72回大会発表論文集』782. (北海道大学, 札幌市) 2008.9.19-21.

山添愛, 吉川左紀子「社会的文脈が表情認知に及ぼす影響—二者の表情の相互作用—」『日本心理学会第72回大会発表論文集』699. (同上). 日本心理学会第72回大会ワークショップ『カウンセリング対話を科学する(2) 言語表現と非言語行動』吉川左紀子「臨床対話における表情:予備的検討」(同上).

日本心理学会第72回大会ワークショップ『対人場面における「微笑み」表情の働き』指定討論. (同上).

日本心理学会第72回大会ワークショップ『日常認知研究の現状と今後への展望 (4) モチベーションと記憶』指定討論. (同上).

講演等

吉川左紀子「若者のこころと現代教養教育のあり方」鹿児島大学稲盛アカデミー開所式 (鹿児島大学, 鹿児島市) 2008.9.1.

吉川左紀子「信頼形成のコミュニケーション」普及事業60周年記念シンポジウム (紀三井寺ガーデンホテル, 和歌山市) 2008.10.2.

吉川左紀子「信頼形成のコミュニケーション」平成20年度滋賀県改良普及職員大会 (県立県民交流センター, 大津市) 2008.12.13.

吉川左紀子「顔認知研究の深さと広さ」文部科学省科学研究費新学術領域研究「学際的研究による顔認知メカニズムの解明」公募説明会1 (日本女子大学, 東京都) 2009.1.25.

吉川左紀子「顔認知研究の深さと広さ」文部科学省科学研究費新学術領域研究「学際的研究による顔認知メカニズムの解明」公募説明会2 (京都大学稲盛財団記念館, 京都市) 2009.2.8.

吉川左紀子「信頼形成のコミュニケーション」平成20年度第3回京都府改良普及職員協議会研修会 (園部総合庁舎, 南丹市) 2009.2.9.

新聞掲載

吉川左紀子「共感し合う『こころ』が備わっている」『ソフィアがやってきた!』『京都新聞』2009.2.15日曜版.

船橋新太郎 (教授)

論文

Watanabe, Y., Takeda, K., Funahashi, S., “Population vector analysis of primate mediodorsal thalamic activity during oculomotor delayed-response performance,” 2009, *Cerebral Cortex*, in press.

船橋新太郎「前頭前野におけるワーキングメモリの神経生理学的研究—その40年の歩み—」『霊長類研究』, 2009, 印刷中.

船橋新太郎「統合失調症のワーキングメモリ—霊長類を用いた研究を通して—」『Schizophrenia Research』, 2008, 51, 219-225.

船橋新太郎「意思決定のしくみ」『Brain and Nerve (神経研究の進歩)』, 2008, 60, 1017-1027.

船橋新太郎「前頭前野における Dynamic Modulation 機構」『分子精神医学』, 2008, 8, 91-101.

Ichihara-Takeda, S., Funahashi, S., “Activity of primate orbitofrontal and dorsolateral prefrontal neurons: effect of reward schedule on task-related activity,” *Journal of Cognitive Neuroscience*, 2008, 20, 563-574.

著書

Funahashi, S., “Learning,” *The Encyclopedic Reference of Neuroscience*, Springer Verlag, 2008.

学会発表

Andreau, J.M. and Funahashi, S. “Neural activity in the primate prefrontal cortex during pair-association performances.” The 38th Annual Meeting of the Society for Neuroscience, Washington, DC, USA. 2008.11.15-19.

Tanaka, A. and Funahashi, S. “A behavioral study of metamemory in monkeys using an oculomotor working memory task.” The 38th Annual Meeting of the Society for Neuroscience, Washington, DC, USA. 2008.11.15-19.

Andreasu, J.M. and Funahashi, S. “Task-related activity of primate prefrontal neurons during pair-association performances.” 14th Biennial Meeting of the International Society for Comparative Psychology, Buenos Aires, Argentina. 2008.10.9-11.

田中暁生, 船橋新太郎「メタ記憶に関わる前頭連合野神経機構の解明」科学研究費特定領域研究『統合脳』第2領域夏の班会議 (北海道厚生年金会館, 札幌市) 2008.8.9.

Andreau, J.M. and Funahashi, S. “Task-related activity of prefrontal neurons during pair-association performances.” 第31回日本神経科学大会 (東京国際フォーラム, 東京) 2008.7.9-11.

松井正太, 田内真惟人, 山本洋紀, 澤本伸克, 福山秀直, 船橋新太郎「ヒト前頭葉における眼球運動関連領域:fMRI研究」第31回日本神経科学大会 (同上).

田内真惟人, 松井正太, 山本洋紀, 澤本伸克, 福山秀直, 船橋新太郎「ヒト前頭眼野におけるボグラフィックマップ:fMRI研究」第31回日本神経科学大会 (同上).

田中暁生, 船橋新太郎「空間性ワーキングメモリ課題遂行中のサルによる戦略的なFization Breakはメタ記憶の使用を示唆する」第31回日本神経科学大会 (同上).

岡澤剛起, 船橋新太郎「アフリカツメガエルの定位行動にみられた短期記憶の影響」第31回日本神経科学大会 (同上).

田中暁生, 船橋新太郎「メタ記憶に関わる前頭連合野神経機構の解明」科学研究費特定領域研究『統合脳』第2領域冬の班会議 (学術総合センター, 東京) 2008.12.13.

講演

船橋新太郎「脳はしばしば間違える—認知における虚と実—」平成20年度京都大学大学院人間, 環境学研究科公開講座『虚実の世界』(京都大学, 京都市) 2009.2.17.

船橋新太郎「前頭連合野のはたらき」GPSS「科学・こころ・宗教」ワークショップ (南山大学宗教文化研究所, 名古屋市) 2008.11.30.

船橋新太郎「注意欠陥／多動性障害 (ADHD) の霊長類モデル」OIST 発達神経生物学ユニット プレ・コンフェレンス (OIST シーサイドハウス, 沖縄県) 2008.11.28.

船橋新太郎「注意欠陥／多動性障害と前頭葉機能」第3回日本情動研究会 (名古屋市立大学病院ホール, 名古屋市) 2008.10.19.

Funahashi, S. “Neural mechanisms of working memory in the prefrontal cortex.” Workshop on Working Memory, 5th European Conference on Complex Systems, Jerusalem, Israel. 2008.9.18-19.

Funahashi, S. “Prefrontal cortex and decision making.” 5th European Conference on Complex Systems, Jerusalem, Israel.

船橋新太郎「前頭連合野からみたヒトのこころ」南山宗教文化研究所懇話会 (南山大学, 名古屋市) 2008.5.9.

Funahashi, S. “Prefrontal cortex and decision-making: how does delay-period activity contribute to the decision of the saccade direction?” International Symposium on Prefrontal Cortical Functions. (Institute of Brain Science, Fudan University, Shanghai, China) 2008.4.1.

カール・ベッカー (教授)

学術論文

カール・ベッカー「日本の宗教的思想が二十一世紀に貢献するもの」, 木村武史編『サスティナブルな社会を目指して』春風社.2008年4月,241-256頁. カール・ベッカー「北米に於けるデス・エデュケーションとその周辺」, 得丸定

子編『いのち教育をひもとく～日本と世界』現代図書.2008年4月,55-80頁, 211-224頁.

カール・ベッカー「アメリカの死生観教育～その歴史と意義」, 島蘭進・竹内整一編『死生学とは何か』東京大学出版会, 2008年5月, 75-104頁.

著書

カール・ベッカー編著, 山本佳世子訳『愛する者の死とどう向き合うか～悲嘆の癒し』晃洋書房, 2008年12月.

対談, 随筆

カール・ベッカー「死生観教育の必要性」, 日本ホスピス・在宅ケア研究会編『ひびきあう生と死～未来を拓くスピリチュアルケア』雲母書房, 2008年5月, 101-114, 178-182頁.

Carl Becker, “Embracing the Pure Land Vision,” In *Never Die Alone*, ed. Jonathan Watts and Yoshiharu Tomatsu. Tokyo: Jodo Shu Press, 2008年7月, 57-89頁.

カール・ベッカー「南無のこころと死生観を巡って」『知恩』2008年7月,770号, 6-17頁, 『知恩』2008年8月, 771号, 6-17頁.

カール・ベッカー「日本の死生学教育～現代の仮題と急務」『京都, 宗教論叢』2008年12月, 3号, 7-19頁, 28-30頁.

カール・ベッカー, 柏木哲夫 (対談)「日本人の死生観～死を迎える時に」, 町淳二編『美しい日本の医療～グローバルな視点からの再生』金原出版, 2008年12月, 47-62頁.

カール・ベッカー, 村上和雄 (対談)「生命のメッセージ」『致知』2009年1月, 402号, 102-108頁.

河合俊雄 (教授)

論文

田中美香, 金山由美, 河合俊雄, 桑原晴子, 山森路子「甲状腺専門病院における心理臨床—身体医から依頼されるケースの分類と特徴—」『心療内科』2008年, 12巻5号, 430-435頁.

河合俊雄「身体病の心理療法」『心理学ワールド』2008年, 43号, 5-8頁. 河合俊雄「内分泌専門病院における心理療法と研究:症状から人へ」, 河合俊雄編『こころにおける身体／身体におけるこころ』2008年, 日本評論社,

99-121頁.

松岡和子, 茂木健一郎, 高野祥子, 河合俊雄, 川戸圓「第3部 討論」日本箱庭療法学会編集委員会『河合隼雄と箱庭療法:箱庭療法学研究』2009年, 21巻特別号, 130-174頁.

河合俊雄「日本における分析心理学」『ユング心理学研究・日本における分析心理学』2009年, 1巻特別号, 創元社, 118-135頁.

河合俊雄「もの・内面・接点——心理療法におけるこころ観を求めて」『モノ学・感覚価値研究』2009年3月, 第3号, 京都大学こころの未来研究センター, 60-70頁.

著書

河合俊雄「心理療法と超越性の弁証法」, 横山博編『心理療法と超越性』新曜社, 2008年5月, 103-125頁.

河合俊雄, 鎌田東二『京都「癒しの道」案内』朝日新聞出版 (朝日新書), 2008年11月.

河合俊雄 (編)『こころにおける身体／身体におけるこころ』日本評論社, 2008年12月.

河合俊雄「いまなぜ日本人は聖地を訪れるのか?」『いちどは行ってみたい日本の聖地』洋泉社, 2009年3月, 94-94頁.

学会発表

河合俊雄「日本における分析心理学」『河合隼雄先生追悼シンポジウム・日本における分析心理学』日本ユング心理学会主催, 京都, 2008.4.20.

“Jungian Psychology in Japan; Between Mythological World and Contemporary Consciousness” *Contemporary Symbols of Personal, Cultural, and National Identity: Historical and Psychological*

現在と今後の展望」日本社会心理学会第第49回大会（同上）。内田由紀子「人の心を動かす普及活動とは―過去の成功事例から学ぶ―」（パネルディスカッション）平成20年度滋賀県改良普及職員大会（滋賀県）2008.12.13.

Uchida, Y., “Culture and emotion: Happiness and interpersonal relationships in the United States and Japan”（招待講演）University of Washington, Department of Psychology, 2009.2.2. Uchida, Y. & Ellsworth, P. C., “Shared and non-shared happiness: Experience and expression of positive emotion in the United States and Japan”（学会発表）Society for Personality and Social Psychology Conference 第10回大会, 2009.2.6.

平石界（助教）論文

Shikishima, C., Hiraishi, K., Yamagata, K., Sugimoto, Y., Takemura, R., Ozaki, K., Okada, M., Toda, T., & Ando, J., “Is g an entity? A Japanese twin study using syllogisms and intelligence tests,” Intelligence, in press. **学会発表など**

Hiraishi Kai（Local Hosting Coordinator）Human Behavior and Evolution Society 20th Annual Conference（Kyoto University）, 2008.6.4-9.

Kai Hiraishi（Symposium Organizer）“Cross-cultural differences and similarities: cultural and evolutionary perspectives”（Symposium title）Human Behavior and Evolution Society 20th Annual Conference（Kyoto University）, 2008.6.6.

内田由紀子, 平石界（企画者）, ワークショップ「文化と進化とこころの未来」, 平石界（話題提供）「氏と育ちと進化と文化」日本心理学会第70回大会（北海道大学）2008.9.19.

安藤寿康, 敷島千鶴, 平石界（企画者）, ワークショップ「社会心理学への行動遺伝学的アプローチ」, 平石界（話題提供）「はじめての行動遺伝学―生まれと育ちとは?―」日本社会心理学会第49回大会（鹿児島大学）2008.11.3.

平石界（発表）「人々は“契約”をどのように捉えるか―思考の認知心理学研究から―」一橋大学国際共同研究センター研究プロジェクト:「契約」の複合領域研究　総括シンポジウム（一橋大学）, 2009.2.4.

一般雑誌

平石界「プラー論文への補足とコメント」『日経サイエンス』2009年4月号（2.25出版予定）.

大石高典（特定研究員）論文

大石高典「モノノケの民族生態学―国家に抗するモノノケたち―」『あらはれ』11号．pp.142-165. 猿田彦大神フォーラム.2008.
大石高典「カメルーン東南部におけるバンツー系住民の漁労採集旅行（エキスペディション）について」生態人類学会ニューズレター第14号. 生態人類学会, 2009.

報告書

FUNAKAWA, S., OISHI, T., FONGNZOSSIE, E. & S. SUGIHARA, “Extensive survey for human-environment interactions in different bio-climatic zones in Cameroon.” An interim Research Report for Ministry of Scientific Research and Innovation（MINRESI）. 2008. 9p. **国際学会発表**
OISHI Takanori, “Mate preferences of the Baka hunter-gatherers and sdjacent Bantu farmers in South-East Cameroon.” Human Behaviour & Evolution Society 20th Annual Conference（HBES2008）, June 4-8th, 2008. Kyoto, Japan.（Poster Presentation）.

国内学会、シンポジウム発表

大石高典「カメルーン東南部の一村落におけるカカオ畑の賃貸/売買をめぐ

Hokkaido, Japan. May 2008.
学会発表

Ban,H., Yamamoto,H., Saiki,J. “Inverse-retinotopic Morphing and Analyzing Method of fMRI Activity in Human V1: an fMRI study.” 2nd Brain & Mind Research in the Asia/Pacific Symposium, Biopolis, Singapore. September 2008.
Ban,H., Yamamoto,H., Mano,H., Umeda,M., Tanaka,C. “Topographic fMRI Responses to Pictrially- or Disparity-defined Occluded Surface in Human Early Visual Areas.” Fifth Asia-Pacific Conference on Vision, Brisbane, Australia. July 2008.
Ban,H., Yamamoto,H., Mano,H., Umeda,M., Tanaka,C. “Neural correlates of amodal completion based on binocular disparity: an fMRI study.” The Japan Neuroscience Society 31st Annual Meeting, Tokyo, Japan. July 2008.

内田由紀子（助教）論文

内田由紀子「文化と感情:比較文化的考察と組織論への意義」『組織科学』2008, 41, 48-55.

Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J. A. S., & Morling, B., “Is Perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent cultures.” Personality and Social Psychology Bulletin, 2008, 34, 741-754.

内田由紀子「日本文化における自己価値の随伴性―日本版自己価値の随伴性尺度を用いた検証―」『心理学研究』2008, 79, 250-256.

内田由紀子「文化と心の相互構成プロセス―文化心理学における文化概念と方法論」『文化人類学研究』2009（印刷中）,9巻.

著書

内田由紀子「文化」、遠藤由美編『社会心理学―社会で生きる人のいとなみを探る（いちばんはじめに読む心理学の本）』ミネルヴァ書房, 2009年3月.

学会発表等

Uchida, Y. “Is Perceived Emotional Support Beneficial ? -Well-Being and Health in Independent and Interdependent Cultures.” The 1st MIDJA Research Seminar（University of Tokyo）2008.4.5.

Uchida, Y., Kitayama, S., & Mesquita, B. “Culture, self, and friendship: Reciprocity monitoring in Japanese and American contexts.”（Symposium “Cross-cultural differences and similarities”）20th Annual conference, Human Behavior & Evolution Society（Kyoto University）2008.6.7.

内田由紀子「文化心理学実験の基礎:『比較』を考える」実験社会科学サマースクール（早稲田大学）2008.9.8.

内田由紀子「サポートの授受における文化心理学的パースペクティブ」（ワークショップ「文化と進化とこころの未来」口頭発表およびワークショップ企画（共同企画者:平石界, 京都大学こころの未来研究センター）日本心理学会第72回大会（北海道大学）2008.9.19.

内田由紀子「普及は心と心をつなぐ」（パネルディスカッション）普及事業60周年記念シンポジウム（近畿農政局, 和歌山）2008.10.2.

内田由紀子「日本文化における『思いやり』の他者理解から」（ワークショップ「文化と心の理論―比較文化研究データからみた日本の子どもの他者理解―」指定討論）日本教育心理学会第50回総会（東京学芸大学）2008.10.13.

内田由紀子「行動科学の文化心理学的パースペクティブ」京都大学大学院医学研究科平成20年度社会健康医学系専攻シンポジウム「公衆衛生, 臨床医学と社会科学」（京都大学）2008.10.25.

内田由紀子「文化心理学と行動遺伝学」（ワークショップ「社会心理学への行動遺伝的アプローチ」指定討論）日本社会心理学会第49回大会（鹿児島大学）2008.11.3.

石井敬子,内田由紀子（企画）自主企画ワークショップ「文化と認知研究の

鎌田東二「書評　久保田展弘『原日本の精神風土』」『日本経済新聞』2008年8月3日.

鎌田東二「書評　山折哲雄『空海の企て』」『時事通信配信』（京都新聞など地方紙各社掲載）2008年11月22日.

鎌田東二「コラム　若者観察室　聖地歩行文化を考える」『毎日新聞』2008年12月2日夕刊文化欄.

鎌田東二「書評　川村湊『闇の摩多羅神』」『日本経済新聞』2009年1月11日.

鎌田東二「書評　高橋睦郎『遊ぶ日本』」『週刊読書人』2009年1月23日.
鎌田東二「鎌田東二と巡る鎌倉・江ノ島の『聖地歩行』」『死ぬまで一度は行きたい日本の聖地』（ムック本）洋泉社, 2009年3月.

鎌田東二「書評　木戸敏郎『若き古代』」『Aube　比較藝術学』2009年3月, 第4・5合併号,121～125頁,京都造形芸術大学比較藝術学研究センター.
鎌田東二（ラジオ出演）「京都東山で心を磨く」『宗教の時間』NHKラジオ第二放送, 2009年2月15日（2月22日再放送）.

鎌田東二（映画製作）,大重潤一郎監督『久高オデッセイ　生章』東京大学理学部小柴ホール初上映.2009年3月7日.

久保（川合）南海子（助教）論文

伊藤祐康,久保（川合）南海子,正高信男「日本人の掛け算九九の実行プロセスについての実験的検討」『認知科学』2008, 15（2）, 280-288.

川合伸幸,久保（川合）南海子「ヒトと動物の回顧的推論について」『認知科学』2008, 15（3）, 378-391.

福島美和,久保（川合）南海子,正高信男「学習に困難を伴う子どもの療育プログラムとそれに伴う認知機能,脳機能の変化について」『発達障害研究』2008, 30（3）,185-194.

久保（川合）南海子,坂田陽子「顔刺激からの注意の解放における加齢の影響」『発達心理学研究』2009, 20（1）, 12-19.

一般雑誌記事

久保（川合）南海子「老齡ザルからみた記憶の変化」『心理学ワールド』2008, 42, 17-20.

翻訳著書

久保（川合）南海子「第12章　健常なエイジングにおける言語の理解と産出」,山本浩市,藤田綾子監訳『エイジング心理学ハンドブック』北大路書房, 2008, 261-287.（J. E. Birren & K. W. Schaie（Eds.）Handbook of the Psychology of Aging.）

学会発表

久保（川合）南海子「忘れること, 忘れないこと―老齡ザルの認知研究から―」近未来チャレンジセッション「認知症予防回復支援サービスの開発と忘却の科学」第22回人工知能学会全国大会（旭川）2008.6.

番浩志（助教）論文

Takahashi,S., Ban,H., Ohtani,Y., Sawamoto,N., Fukuyama,H., Ejima,Y., “Neural mechanisms for perceptual permanency: an fMRI study of the tunnel effect.” Gestalt Theory, 2008, 30, 39-51.

著書

Yamamoto,H., Ban,H., Fukunaga,M., Umeda,M., Tanaka,C., Ejima,Y., “Large- and Small-Scale Functional Organization of Visual Field Representation in the Human Visual Cortex.” In: Portocello T. A. and Velloti R. B. editors. Visual Cortex: New Research. New York: Nova Science Publisher. 2008.

講演

番浩志「視覚文脈が低次視覚野活動に及ぼす影響:fMRIによる可視化法」知覚コロキアム（福岡）. 2009年3月20日～22日.

Ban,H., Watabe,M., “Trust Information Processing in Human Brain: an fMRI Study.” Center for the Socieliaty of Mind International Conference “Cultural Neuroscience” Hokkaido University, Sapporo,

Perspectivesthe. Third Multidisciplinary Academic Conference of the International Association for Analytical Psychology in Zurich, 2008.7.3-5.

田中美香,河合俊雄,金山由美,桑原晴子,山森路子「パウムテストからみたパセドウ病患者の心理的特徴―カウンセリング群とコントロール群の比較研究―」『日本心理臨床学会第26回大会発表論文集』2008.

河合俊雄「甲状腺疾患患者の語り：病の自己性と他者性」『シンポジウム病と臨床―病に生きる人間にみる臨床の知』大学院教育改革支援プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」京都大学グローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」（共催,京都大学）2008.11.17.

田中美香,河合俊雄,金山由美,桑原晴子,梅村高太郎,長谷川千紘,鍛冶まどか,谷垣紀子,深尾篤嗣,窪田純久,深田修司,宮内昭「甲状腺疾患患者の心理的特徴―2種類の心理テストによる比較研究―」第51回日本甲状腺学会. 2008.11.22.

テレビ出演

河合俊雄「にっぽん巡礼:こころに響く百の場所」NHK・BSハイヴィジョン, 2009年3月22日放送.

鎌田東二（教授）論文

鎌田東二「宮沢賢治の作品に見られる<心>」『大法輪』2008年5月号, 124-129頁, 大法輪閣.

鎌田東二「柳宗悦と宮沢賢治と出口王仁三郎における宗教と芸術」『京都造形芸術大学紀要 Genesis』2008年11月, 第12号, 128-138頁, 京都造形芸術大学.

鎌田東二「異界の旅と東山修験道」『彷徨』2009年1月号,2-5頁,彷徨社.
鎌田東二「京都,平安京と聖地霊場」『月刊京都』2009年2月号, 28-32頁, 白川書院.

鎌田東二「和回帰と神仏巡礼道文化ルネサンス」『ハイライフ』2009年2月, 第11号, 8-9頁, 財団法人ハイライフ研究所.

鎌田東二「神の食――神饌における祈りとエロスと美」『Aube 比較藝術学』2009年3月, 第4・5合併号, 18-32頁, 京都造形芸術大学比較藝術学研究センター.

鎌田東二「言葉とモノとワザとこころ」『モノ学・感覚価値研究』2009年3月, 第3号, 4-12頁, 京都大学こころの未来研究センター.

鎌田東二「日本の医書と医療神・オホナムチ」『地球人』2008年10月, 第12号, 64-69頁, ビイング・ネット・プレス.

著書

鎌田東二『聖地感覚』角川学芸出版, 2008年9月.

細野晴臣, 鎌田東二『神楽感覚』作品社, 2008年10月.

河合俊雄, 鎌田東二『京都「癒しの道」案内』朝日新聞出版（朝日新書）, 2008年11月.

鎌田東二監修『神様に出会える聖地めぐりガイド　ものがたり「古事記」併録』朝日新聞出版, 2009年3月.

鎌田東二「河合中空構造論と権力と脱権力のあわい――トリックスター知の再考」,日本ユング心理学会編集委員会編『ユング心理学研究』（第1巻特別号　日本における分析心理学）, 50-75頁, 創元社, 2009年3月.

学会発表

“A Study of Relationship between Shinto and Japanese Buddhism.” The XXII World Congress of Philosophy, Seoul University. 2008.8.1.

鎌田東二講演「保育と聖地歩行」.　世界哲学会議　ソウル大学人体科学会「いま,なぜ『リクリエイト歩行文化』なのか〜歩育と歩行」人体科学会第18回大会公開シンポジウム, 関西大学. 2008.11.23.

新聞、インタビュー、ラジオ出演、映画制作

鎌田東二「福来友吉①～③」『中外日報』2008年4月1日, 3日, 8日, 中外日報社.

鎌田東二「河野省三①～③」『中外日報』2008年5月15日, 20日, 22日, 中外日報社.

るトラブルと民族集団間関係—プランテーションをめぐるバカ、ピグミー、ハンツ—系住民　バクエレ、ハウサの三角関係—」日本アフリカ学会第45回学術大会講演（ポスター発表）、龍谷大学、2008.5.24-25.

大石高典「フィールドの映像記録に見る研究者 = 《私》の「生態」:カメルーン共和国ドンゴ村における6年間の映像資料の分析から」日本文化人類学会第42回研究大会分科会「映像実践にもとづくフィールドワーク論の構築に向けて」講演（口頭発表）、京都大学、2008.5.31.

大石高典「モノノケの民族生態学」猿田彦大神フォーラムおひらきまつり第10回みちひらき助成研究発表会、猿田彦神社（三重県伊勢市）、2008.10.13.

大石高典「撮ることと撮られること:フィールドの映像記録に見る調査者と被調査社会の相互作用」京都大学グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」ワークショップ『撮るものと撮られるものの関係性——事実と物語の生成的関係をめぐって』京都大学芝蘭会館（京都市）、2008.11.5.

国際映画祭への映像作品出品

'Bisso na Bisso (Among us) : Gathering, Catching, Hunting, Filming and Beyond in Ndongo village' at “Documentary Film Festival on Japanese Society, and Visual Anthropology” on February 24th, 2009, Théâtre Monnot, Université St. Joseph, Beyrouth, Lebanon.

学術研究会・シンポジウム企画、開催

新井一寛・大石高典企画、司会、話題提供、公開シンポジウム「映像作品制作と地域の論理・倫理—自然を撮る、人を撮る、かかわりを撮る—」主催:『仮想地球』研究会、京都大学芝蘭会館（京都市）、2008.6.7.

大石高典企画、司会、公開シンポジウム「マツタケがなくなぐ世界」主催:京都大学マツタケ研究会、共催:こころの未来研究センター（京都大学）2008.9.20.

有田恵（特定研究員）

論文

高橋恵子、平井美佳、有田恵、菅原育子「発達研究における中・高年者のデータの持つ意味」『日本発達心理学会第19回大会発表論文集』1019（追手門学院大学、大阪市）2008.3.19-21.

有田恵「〈質〉の層—意味とモデル化—」『日本質的心理学会第5回大会発表論文集』73-74（つくば大学、つくば市）2008.11.29-30.

有田恵「子どもの死と死生学」、武田鉄郎編、科学研究補助金基盤研究B「小児がん等のターミナル期にある子どもの教育内容・方法に関する国際比較研究」（2009年3月刊行予定、印刷中）.

有田恵「死と生涯発達心理学」、武田鉄郎編、科学研究補助金基盤研究B「小児がん等のターミナル期にある子どもの教育内容・方法に関する国際比較研究」（同上）.

学会発表・企画等

平井美佳・有田恵・菅原育子（発表）「発達研究における中・高年者のデータの持つ意味」『日本発達心理学会第19回大会自主シンポジウム』2008.3.19-21.

大倉得史、有田恵（企画・発表）「変化を問う質とは何か—モデル化できる質、できない質—」『日本質的心理学会第5回大会自主シンポジウム』（つくば大学、つくば市）2008.11.29-30.

有田恵（講演）「終末期における児童・生徒への教育的支援—らしさを支えるとは」桃陽特別支援総合学校教員研修会（桃陽特別支援総合学校、京都市）2009.9.18.

有田恵（指導助言者）「訪問教育—訪問教育の今後のあり方—」『全日本特別支援教育研究連盟全国大会第47回大会』京都市大会第21分会（桃陽特別支援総合学校、京都市）2008.10.30.

有田恵「臨床現場と理論をつなぐ研究者」平成20年度第9回死生学演習　臨床死生学・倫理学研究会（東京大学、東京）2008.12.18.

有田恵「生涯発達から捉える死」タナトロジー研究会（岡部医院、仙台市）2009.1.16.

畑中千紘（特定研究員）

論文

高嶋雄介、須藤春佳、高木綾、村林真夢、久保明子、畑中千紘、山口智、田中史子、西嶋雅樹、桑原知子「学校現場における事例の見方や関わり方にあらわれる専門的特徴」『心理臨床学研究』2008.26（2）、p.204-217.

Tomoko KUWABARA, Haruka SUDO, Chihiro HATANAKA, Masaki NISHIJIMA, Kenichi MORITA, Chihiro HASEGAWA, Yasuhiro OYAMA, “A Study on the New Paradigm in Collaborations between Teachers and School Counselors,” *Psychologia*, 2008,51（4）.（3月発刊予定、ページ数未定）.

著書

畑中千紘「自閉の世界への他者の現れについて——アスペルガー症候群の老年期男性事例より」伊藤良子、角野善宏編『京大心理臨床シリーズ7　発達障害と心理臨床』創元社、2009年3月発刊予定、p.172-181.

学会発表

畑中千紘「発達障害の女子中学生との箱庭療法事例」（事例発表）韓国箱庭療法学会（ソウル）2008.6.12.

畑中千紘、桑原知子、須藤春佳、西嶋雅樹、森田健一、井上明美、長谷川千紘、宮嶋由布、大山泰宏「学校現場における教師と心理臨床家の視点に関する研究Ⅳ—スイスとの国際比較から—」（研究発表）日本心理臨床学会第27回大会（筑波大学）2008.9.5.

長岡千賀（日本学術振興会特別研究員）

論文

長岡千賀、小森政嗣「面接におけるカウンセラーの応答:話者交替時のカウンセラーの発話冒頭を指標とした事例研究」『認知科学』、2009、16（1）、24-38.

Nagaoka, C., & Komori, M., “Body movement synchrony in psychotherapeutic counseling: a study using the video-based quantification method,” *IEICE Transactions*, 2008, E91-D（6）, 1634-1640.

小森政嗣、長岡千賀「ロボットに対する心理評価における社会的比較過程—ロボットのユーザへの選択的接近行動が好意評価に及ぼす影響—」『感性工学』、2008、7（4）、807-814.

著書

中村敏枝、長岡千賀「第3章　相互コミュニケーションにおける同調傾向」、大坊郁夫、永瀬治郎編『関係とコミュニケーション』（社会言語科学第3巻）、ひつじ書房、80-99頁.

学会発表等

Nagaoka, C., Kuwabara, T., Watabe, M., & Yoshikawa, S., “Understanding the client in psychotherapy: What do counselors recall about their clients?” *ICCS 2008*（Seoul）, 2008.7.29.

長岡千賀、前田恭兵、小森政嗣「心理臨床面接における対話者の身体動作（1）—カウンセラーとクライアントの身体動作の相互影響過程—」日本認知科学会第25回大会（同志社大学）2008.9.7.

小森政嗣、長岡千賀、鎌田遼平「心理臨床面接における対話者の身体動作（2）—再起定量化分析によるカウンセラーの身体動作の検討—」日本認知科学会第25回大会（同上）.

長岡千賀、桑原知子、吉川左紀子、小森政嗣、渡部幹「心理面接における話者理解に関する実証的検討（4）—話者交替時のカウンセラーの言語的表現—」日本心理学会第72回大会（北海道大学）2008.9.21.

小森政嗣、長岡千賀（話題提供）「カウンセラーとクライアントの身体動作の相互影響過程」ワークショップ『カウンセリング対話を科学する（2）—言語表現と非言語行動—（企画者:桑原知子）』日本心理学会第72回大会（同上）.

長岡千賀、渡部幹（話題提供）「カウンセラーの相槌的表現」ワークショップ『カウンセリング対話を科学する（2）—言語表現と非言語行動—』日本心理学会第72回大会（同上）.

*本誌の刊行にはこころの未来基金から支援を受けました。

編集後記

こころを研究するのはむずかしいけれども、こころについて語り合うのはとても楽しい。語るうちに話が発展し広がってゆくのも、こころをめぐる対話の特徴かもしれません。学問は人間関係によって支えられている、という松本紘総長、自然科学としての言語学の可能性を語られた長尾真先生、その楽しそうなお話しぶりまでお伝えできることを願っています。そして充実した論考をお寄せいただいた先生がたに、深謝いたします。校正刷であることを忘れ、思わず読みふけてしまいました。(吉川)

第2号が年度内に発行できた。創刊号に劣らない充実した内容だ。五木寛之さんの巻頭言から始まり、現総長、元総長との対談と座談会、研究プロジェクトの紹介、連携する研究者の方々からの寄稿、それぞれに読み応えのある内容であると思う。これからも積極的に国内外・学内外の連携研究者の方々の論考を掲載していきたい。第3号は2009年9月発行予定。ご期待ください。(鎌田)

表紙をめくったらテレビや雑誌でお見かけする顔が……。読者の皆さまも、今回の巻頭言の執筆者には驚かされたのではないのでしょうか。かくいう私も、編集委員会で案が出たときには三信七疑でした。鎌田先生の人脈には驚くばかり。6人たどれば世界とつながると言いますが、この方がいれば3人ほどですみそうです。その五木寛之さんをはじめ、お忙しい中、ご執筆いただいた皆さまに感謝いたします。(平石)

余裕を持ってスタートしたつもりでも、最後はいつも慌ただしくなり、執筆者の先生方にまでハードなお願いをさせていただくことも多い。今回も同様だったが、みなさま快く協力してくださったおかげで第2号を刊行することができました。優れた研究者は人間の魅力に満ちあふれているということを再認識させていただいた松本紘総長、長尾真元総長をはじめ、お力添えいただいた先生方、関係者の方々に心より感謝申し上げます。(原)

こころの未来 ————— 第2号
KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

発行日 2009年3月31日

発行 京都大学こころの未来研究センター
〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学稲盛財団記念館内

電話 075-753-9670

FAX 075-753-9680

<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/>

表紙写真 大石高典 (バショウの葉)
編集・制作 編集工房レイヴン 原 章
デザイン 薔草デザイン事務所 尾崎閑也
印刷 株式会社NPCコーポレーション

